

中学校

平成 6 年 度

教育研究員研究報告書

外国語 (英語)

東京都教育委員会

平成6年度

教育研究員名簿(外国語)

分科会名	区市町村名	学 校 名	氏 名
第1分科会	杉並区	宮前中学校	春日陽子
	板橋区	板橋第二中学校	東條正幸
	八王子市	四谷中学校	大石龍
	武蔵野市	第六中学校	◎鈴木守
	保谷市	保谷中学校	麻生伴吉
第2分科会	中野区	北中野中学校	○三岡一隆
	練馬区	大泉第二中学校	吉川彩子
	足立区	第十二中学校	久保田晃司
	葛飾区	東金町中学校	中蔦隆俊
	町田市	金井中学校	北坂茂樹
	瑞穂町	瑞穂第二中学校	大久保圭二郎
第3分科会	品川区	平塚中学校	前原陽子
	大田区	大森第四中学校	□米澤登志子
	世田谷区	北沢中学校	阿部啓介
	江戸川区	小岩第五中学校	金田仁志
	立川市	立川第二中学校	横山牧子

◎ 世話人 ○ 副世話人 □ 記録

担当 教育庁指導部中学校教育指導課 加藤良則

研究主題

表現力を高め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する指導の工夫

目 次

I	研究主題及び主題設定の理由	2
II	研究の経過	3
III	実態調査の結果	4
IV	研究の内容	5
	第1分科会	
1	小主題	5
2	小主題設定の理由	5
3	仮説	5
4	具体的な方策	5
5	研究の成果と課題	9
	第2分科会	
1	小主題	10
2	小主題設定の理由	10
3	仮説	10
4	具体的な方策	10
5	研究の成果と課題	17
	第3分科会	
1	小主題	18
2	小主題設定の理由	18
3	仮説	18
4	具体的な方策	18
5	研究の成果と課題	23
V	まとめと今後の課題	24

I 主題設定の理由

現行の学習指導要領に示された中学校英語科の目標では、国際化の進展に対応し、国際社会の中に生きるために必要な資質を養うという視点から、「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」を目標の一つとして挙げている。このことは、知識・理解・技能の学習に重点を置くとともに、学習者の意欲・関心を高め、英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てていくことの重要性を述べているものである。

生徒たちに英語についてのアンケートで実態調査をしたところ、英語を使って自分の考えなどを話したり、書いたりして相手との意志の疎通を図りたい、つまり表現を高めたい、といった希望を持った生徒が多いということが分かった。その一方、必ずしもその希望が意欲に結びついていない現状も明らかになった。この理由としては、コミュニケーション活動の時間が少ないことや、場面設定の仕方が生徒たちの実際の興味・関心に合わないことが考えられる。

以上の問題点を解決するために、コミュニケーション活動を授業の中に多く取り入れたり、内容も臨場感のあるものにするなど、工夫を凝らすことが有効ではないかと考えた。質の高いコミュニケーション活動の場면을多く取ることは、生徒の表現力を高めることになる。同時に、それは積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することにもつながり、また両者には、相互に深いつながりがある。

そこでこの研究を進めるにあたり、次の三つの小主題を設定し、授業研究を通して指導の工夫を図りながら研究主題へのアプローチを試みた。

第1分科会は「コミュニケーション活動の機会を多くし、話す力や主体的に話そうとする意欲を高める指導の工夫」という小主題で、工夫を凝らした段階的・発展的なコミュニケーション活動を多く取り入れることにより、表現力を高めようと考え、工夫を図った。

第2分科会は「『書くこと』を基盤とした表現力を高める指導の工夫」という小主題で、言語活動を通して自分で表現する機会を多く与えることにより、表現力を高めさせるための研究を進めた。

第3分科会は「表現力を高めることを通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する」という小主題で、生徒が授業で活動しやすい雰囲気を作り、意欲的な態度を育てる授業のあり方を工夫することにした。

II 研究の経過

16名の研究員が三分科会に分かれ、各自の文献研究と授業研究を通して、研究員相互の理解を深めながら実りある研究活動を展開することができた。

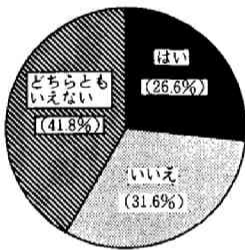
総 会	——	都立教育研究所	14:30～
(4月12日)		研究員委嘱 事業説明 年間予定 自己紹介 世話人等選出	
第1回月例会	——	練馬区立大泉第二中学校	14:00～
(5月10日)		研究主題決定 内容検討 研究の進め方の検討	
第2回月例会	——	大田区立大森第四中学校	14:00～
(6月13日)		研究内容検討 三つの分科会の決定 仮説の検討 研究構想	
第3回月例会	——	品川区立平塚中学校	14:00～
(6月27日)		研究授業(前原陽子教諭) 先行研究の検討 調査項目の検討	
第4回月例会	——	江戸川区立小岩第五中学校	14:00～
(7月7日)		研究内容・方法の具体化 実態調査の検討	
御岳研究集会	——	青梅市御岳山宿坊	
(8月20日～22日)		問題点の整理・検討 研究内容・方法・仮説の検討	
第5回月例会	——	足立区立第十二中学校	14:00～
(9月13日)		研究授業(久保田晃司教諭) 報告書プロット作成 執筆分担	
第6回月例会	——	世田谷区立北沢中学校	14:00～
(10月21日)		研究授業(阿部啓介教諭) 研究内容の実践検証 第一次原稿検討	
第7回月例会	——	板橋区立板橋第二中学校	14:00～
(10月31日)		研究授業(東條正幸教諭) 研究内容の実践検証 第二次原稿検討	
第8回月例会	——	八王子市立四谷中学校	14:00～
(11月17日)		最終原稿提出 発表会準備 補助資料作成 第三次原稿検討	
第9回月例会	——	武蔵野市立第六中学校	14:00～
(1月17日)		発表会準備(係分担) 指導案検討 補助資料の検討	
研究発表会	——	中野区立北中野中学校	14:00～
(2月6日)		公開授業(三岡一隆教諭) 研究発表 研究協議 反省会	

Ⅲ 実態調査の結果

主題設定の後、研究のガイドラインとするために、7月の初旬に一斉にアンケートを行った。その内容は、英語に関する一般的な質問から各分科会で参考としたい事項を含む11項目16問となった。その11項目の中から特徴的なものを選び、グラフで示しながら述べていくことにする。

まず、「あなたは英語が好きですか。」という質問に対して「いいえ」と答えた生徒は全体としては少なかった。しかし、その中で学年を追うごとに数が増えて3年生の男子では「はい」を大きく上まわってしまう。その大きな要因として考えられるのが、「英語を学ぶ上で、あなたはどれが苦手ですか。」の設問の回答に表れている。4技能の中で「話すこと」「書くこと」が上位を占めているのである。ここから、表現力をうまく身に付けていないために、英語への苦手意識が生じてしまっていることが想像できる。

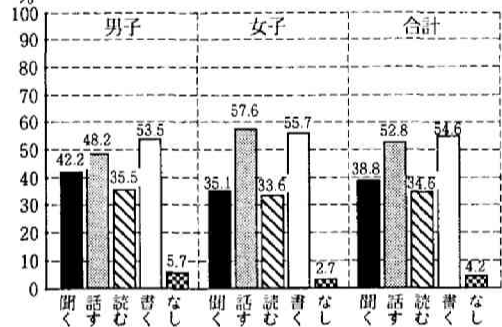
あなたは英語が好きですか
(3年男子)



あなたは英語が好きですか
(全学年計)

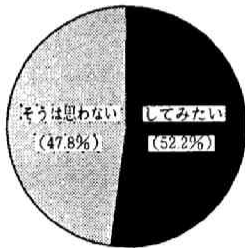


あなたは英語を学ぶ上で、どれが苦手ですか

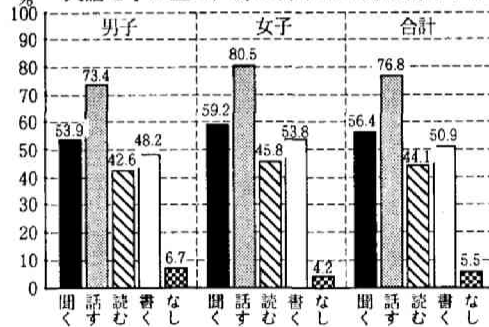


次に、研究主題と大きく関係する「あなたは自分の関心のあることなどについて、英語で話したり書いたりしてみたいですか。」の問いには、「したい」という意欲がある生徒が半数しかないことが判明した。これは、絵を見て自ら表現する設問で、一文も書けない、または全く書こうとしない生徒が各学年とも最も数が多かったことで証明できる。しかしその反面、「英語を学ぶ上で、身に付けたい力は何ですか。」の設問には「話す力」「書く力」が上位を占めるという結果も出ている。

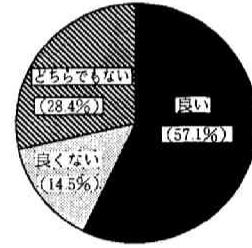
あなたは、自分の関心のあることなどについて英語で表現してみたいですか



英語を学ぶ上で、身に付けたい力は何ですか



先生が授業で英語をなるべくたくさん使うことに対して、どう思いますか



さらに、興味深い結果として「先生が、なるべくたくさん英語を使って授業を進めることに對して、あなたはどう思いますか。」の設問に、「良い」と答えた生徒が半数を大きく上回った。これは、英語を一教科としてではなく、言語としてとらえ、生きた英語に触れたいという気持ちを持つ生徒が多くいることを示している。

以上の結果から「生徒は表現力を高め、コミュニケーションを図りたい希望を持っているが、苦手意識も強く抱いている。」ことが明らかになった。

IV 研究の内容

第1分科会

1 小主題

コミュニケーション活動の機会を多くし、話す力や主体的に話そうとする意欲を高める指導の工夫

2 小主題設定の理由

本年度7月に行った実態調査によると、全学年を通じて「身に付けたい力」のトップは、英語を「話すこと」であった。しかし、同時に、英語を「話すこと」は「苦手」で「普段は自ら進んで話していない」という結果も出た。このことは、授業において、生徒が英語を話す場面が依然として少ないからだと考えられる。

そこで、本分科会では、次の目的を達成するために、小主題を設定した。

コミュニケーション活動の機会をできるだけ多く設定することによって、話す力や主体的に話そうとする意欲を高める。

3 仮説

上記の目的には、次のような仮説が基盤となっている。

生徒に、基礎からの段階的・発展的なコミュニケーション活動を数多く行わせることによって、成就感・達成感をもたせれば、英語を話す力や話そうとする意欲が高まるであろう。

4 具体的な方策

本分科会では、上記の仮説に基づき、次のようなコミュニケーション活動を考え、実践を試みた。

このコミュニケーション活動は、教師によって示されたある絵を、二人一組となった生徒が見て、それぞれ思いついたことを話題にのぼらせ英語で話をする、一種のペアワークである。これは、単に絵を見て思いついた事を言わせる Describing 活動から、相手に同意や感想または意見を求め、話題を深化させる Expressing 活動を行うことも、上級学年では可能である。生徒のコミュニケーション能力の発達に応じて、以下のように三つの段階を踏みながら発展させていくところに特徴がある。本研究では、この活動を 'Graded Communicative Activity' (以下 GCA と略す) と名付けた。

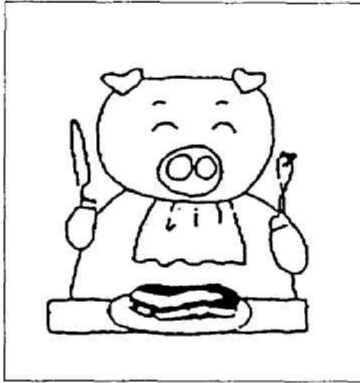

(1) 授業の中の位置付けと時間配分


位置づけ：授業の導入部分	
時間配分：第1段階～第2段階	5分間
第3段階	10分間

GCAは特定の言語形式（Key Sentenceなど）にとらわれず、既習の表現や単語、文法の知識を使って、英語で自由に表現する活動である。したがって、授業の中では、導入部分でこの活動を行わせると、より効果的であると思われる。

ただし、生徒が思いついた単語をただ羅列するのではなく、なるべく文の単位で表現できるようにするため、生徒がこの活動で使うと予想される表現の練習を、あらかじめ Pattern Practice等で行っておくとよい。

(2) 段階の手順

段階	回数	活動の内容	生徒の考えた英文（そのまま記載）
第1段階	4回	<p>★生徒全員に一定時間、絵を見せる。時間の長さは、生徒の実態に応じて考えてよい。</p> <p>★生徒は、絵を見て思いついた単語や1文以上を英語で考える。自信がなければメモをとることもできる。</p> <p>英語のつづりのわからない場合はカタカナで書いてもよいが、日本語は不可とする。</p> <p>★メモを見ないで発表させる。</p>	 <p>A pig. Pig. The big pig. フォーク！ ナイフ！ ステーキ！</p> <p>(例：1年生)</p>
第2段階	4回	<p>★ペアを作らせる。</p> <p>★生徒全員に一定時間、絵を見せる。時間の長さは、生徒の実態に応じて考えて決める。</p> <p>★生徒は、絵を見て思いついた2文以上を英語で考える。</p> <p>1文：説明文や感想など 1文：内容に関する質問文 (Yes/No Questionに限定)</p> <p>★質問に対する答え方の複雑さを考えさせるため、Yes/No Questionに限定する。</p> <p>★メモを見ないでペアワークをさせる。この時、YesやNoだけで答えることは不自然であることを少しずつ感じとらせる。</p>	 <p>[NEW CROWN 1 (三省堂) P48, 50より]</p> <p>Kumi is Japanese. Jim likes dog. Is Jim your pen friend? Who is she? Her name is princess.</p> <p>(例：1年生)</p>

第 3 段 階	6 回	<p>★ペアを作らせる。</p> <p>★生徒全員に一定時間、絵を見せる。時間の長さは、生徒の実態に応じて決める。</p> <p>★生徒は、絵を見て思いついた2文以上を英語で考える。</p> <p style="padding-left: 2em;">1文：説明文や感想など</p> <p style="padding-left: 2em;">1文：内容に関する質問文 (内容は自由)</p> <p>★メモを見ないでペアワークをさせる。この時、YesやNoだけで答えることは不自然であり、教師の指導により、さらに1文を付け加える工夫をさせる。</p> <p>なお、well, let's see, uh, など間合いを取る表現も教えておくとよい。</p> <p>適切なジェスチャーも入れさせながら、話をさせる。</p>		<p>写真： ジョイナーが走っている。</p>
		<p>A: This is Joyner.</p> <p>B: Yes.</p> <p>A: Where is this?</p> <p>B: I think it's Seoul. She is beautiful.</p> <p>A: I think so too.</p> <p>B: Do you like her?</p> <p>A: Yes, I do.</p> <p style="text-align: right;">(例：2年生)</p>		

(3) GCA で使用する絵を選択する視点

絵の使用に関しては、次の4つを考慮の上、選択するとよい。

ア 絵と各段階の関係はない

第1段階で複雑な絵を使うこともできる。

イ 話題性のある物

スポーツなどはやっているものは興味を引くので、話しやすい。

いろいろな物をたくさんの人が載っている物は、話題をつかみやすい。

ウ 情報量の多い物

動きのあるものや、人によって見方が異なるもの(例えば、「一番好きな季節」)などは対話になりやすい。

エ 既習の言語材料のある物

あらかじめこの活動に入る前に、描かれてある絵で使えるような文型を口頭で練習しておく、文が出やすい。

(4) 指導上の留意点

ア Describing を行う目的と、絵の状況設定がはっきりした状態で指導する。

イ 使用する絵は、既習の言語材料ができるだけ多く織り込まれた物を意図的に用いる。

ウ Describing では絵の内容をなるべく詳しく伝えさせる。

- エ Describing で絵を見る時間の長さと同段階の回数については特にこだわらない。
- オ Describing の活動の前に、Pattern Practice などで練習をしておく、単語のみの表現から文を使って表現させることにつながる。
- カ 達成目標については、第1学年では語彙力・既習事項の少なさの関係で、Describing のみでいいが、第2学年以降は生徒の実態に応じて、順次 Describing から絵を見て意見や感想などを述べる Expressing 活動も適宜組み合わせ、より高度な活動に入るとよい。

(5) 評価

GCA の評価は、自己評価・他己評価を行う。
 以下のような活動評価票を使い、毎回の活動をチェックする。

活動評価票

Class C No. 13 Name _____

◦以下の観点で、自分の事と、会話のパートナーの事について、よくできた→A、できた→B、あまりできなかった→C を記入しよう。

自分の活動に対する評価							パートナーの活動に対する評価						
ア. 英語らしく話せたか。 イ. 自分の言いたい事が、伝えられたか。 ウ. 必要に応じて、身振り、相づちなどが使えたか。 エ. 意欲を持って活動に取り組んだか。 オ. 楽しくやりとりができたか。							ア. 英語らしく話していたか。 イ. 言いたい事が、伝わってきたか。 ウ. 必要に応じて、身振り、相づちなどを使ったか。 エ. 意欲を持って活動に取り組んでいたか。						
月/日(曜日)	内 容	ア	イ	ウ	エ	オ	感 想	パートナーの名前	ア	イ	ウ	エ	感 想
9/7(金)	夏休みのインタビュー	B	A	C	A	A	いいことが言えた	Aki	B	A	C	A	話の内容が面白かった
9/13(火)	(スコットランドの)ダンスの写真について	B	A	C	A	A	話しくかった。	Aki	B	B	C	A	面白い点に気付いたと思った。
10/13(木)	ジョイナーの写真を見て	A	A	B	A	A	話題が意外で面白かった。	Osamu	B	A	B	A	喋り方が面白かった。
11/2(水)	Talking on the telephone	A	A	B	A	A	身振りが使えたらいいと思う	Eddie(先生)	A	A	A	A	身振りがよかった。
11/5(土)	巨人優勝の写真	A	A	B	A	A	もっといっぱい話せばよかった。	Yumi	A	A	B	A	とてもよかった。

5 研究の成果と課題

第1分科会では、コミュニケーション活動の中の speaking に焦点を当て、話す力や話そうとする意欲を高める指導の工夫として、基礎から段階的・発展的な活動を行っていく GCA の実践に取り組んだ。その結果、次のような成果と課題が明らかになった。

(1) 成果

7月と11月に行った同一の実態調査の結果や、授業中の教師による観察等から、GCAの取り組みの成果として、以下の六点が挙げられる。

ア 意欲的にコミュニケーション活動に挑戦してみようとする姿勢が現れてきた。

① 分からないことを英語でどう表現するのかという質問が、積極的に発せられるようになった。

② 多少の誤りにはこだわらず、英語で表現しようとする態度が見られるようになった。

③ 一部の生徒から、外国人英語指導員の来校が待ち遠しいという声があった。

イ 活動後の評価票に、「楽しくやりとりができた」という成就感に満ちた感想が多かった。

ウ 自分のことを伝え、また相手の状態を聞こうとする姿勢がどの生徒からもうかがえた。

エ 単語から文へと、生徒の表現力の高まりが見られるようになった。

オ 会話の自然な流れを作り出せる生徒が、数多く見られるようになった。

カ writing 活動にも、質と量の両面において成果が反映されているように思われる。

(2) 課題

GCAの取り組みを続けるうちに、性格の異なる二つの活動の形態に気づいた。一つは事実を述べさせる活動、もう一つは事実を踏まえ、それを一步踏み込んで個人の意見や感想を織り込んだ表現活動である。ここでは、前者を Describing (事実表現) 活動、そして後者を Expressing (意見や感情の表現) 活動として区別した。そこで出てきた課題は、以下のとおりである。

ア GCA 実施の際の situation の与え方を研究する必要がある。これは、実施上の留意点とも重なる点であるが、コミュニケーション活動という視点から、situation の設定を工夫し、GCA の活動がより communicative なものになるようにしなければならないということである。

イ Expressing 活動の評価方法の確立が必要である。Expressing 活動では、Describing 活動における 5 W 1 H といった評価の基準の設定が極めて難しい。そこで、客観的でかつ合理的な評価方法の確立が是非とも必要である。

ウ 相手に伝わりさえすればよいという身振りや単語だけの表現から、より質が高く正確な表現力の育成を図っていくことが必要である。これは、自分の意図する事柄を、意見や感想まで含めて、ある程度表現できる能力と積極的な態度が身に付いてからの課題であると言える。つまり、伝えようとする気持ちさえあれば、ジェスチャーや、文にならない単語の使用だけでも、自分の意向を相手に伝えることはある程度可能であるが、英語による表現力の育成という観点からは、文で表現すべき事柄は文で表現できることが望ましい。いわば、英語による本来の表現力ともいえるこの力を、今後どのように育成していくべきかという課題が残された。

第2分科会

1 小主題

「書くこと」を基盤とした表現力を高める指導の工夫

2 小主題設定の理由

7月に行った実態調査の結果から、4技能のうち、英語で「書くこと」は、英語が好きな理由の上位にあるのと同時に、英語が好きではない理由の上位にもあることが分かった。昭和63年度の「教育研究員報告書」研究においても、「書くこと」は、表現力を高めるために有効ではあるが、個人差が大きいことから、今後の課題として、授業の中で個々の生徒に対して指導する時間を多く設定することなどが挙げられている。このことから、書く力を伸ばすことは、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の育成につながるものと思われる。また、自分の考えや関心のあることを英語で書いて表現したいという気持ちはあっても、実際にそれが授業中の意欲に結び付いていない生徒が多いことが分かった。そこで本分科会では、「書くこと」を通して、自分で表現する機会を多く与え、語彙力や文法力の育成を図り、題材を工夫し、適切に評価をすることによって、表現力を高めさせ、自分の考えや感情など、表現したい事柄をまとめた文章として書き表せるようにすることを目的として研究を進めたいと考え、本小主題を設定した。

3 仮説

書く題材を工夫し、適切な助言や評価をしながら、自分で思いついたことを書いて表現する機会を多く与えていけば、表現する力や意欲が高まるであろう。

4 具体的な方策

(1) 指導の手順

仮説に基づき段階的・発展的な工夫が必要と考え、以下のような指導をした。

段階	目的	状況の設定	指導内容	評価の主な観点
第1段階	見たことを表現する力を高める。	ビデオ、写真、絵などを見てその状況を人に伝える。	思いついた単語を挙げさせ、それを伝えるのに効果的である順に並べ替えさせながら作文させる。	・単語を多く挙げられたか。 ・その単語を使って多くの文を作れたか。
第2段階	思ったことを表現する力を高める。	有名人へのファンレターを書く。	基本文の Pattern Practice を行い、その文型を含む十個以上の文を作らせ、できた者から教師がチェックした。	・基本文型が効果的に使えたか。 ・英文を多く書けたか。 ・自分の気持ちを書き表すことができたか。

第3段階	相手の反応を考えて表現する力を高める。	有名人と出会ったときのスキットを作る。	その人への手紙（第二段階で作ったもの）を紹介しておき、班毎に一つのsituationの会話を作文させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・現実的な場面設定ができたか。 ・対話文が多く作れたか ・自然な会話文であるか
------	---------------------	---------------------	------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(2) 指導上の留意点

上記の指導をする上で以下の点に留意した。

ア 積極的に表現したくなるような題材を選ぶ。

言葉を使うのは、「知りたい、知らせたい」という気持ちがあるからである。そこで、今回は実態調査の結果から、多くの生徒が興味を持っているスポーツに題材を絞った。

イ 語彙力・文法力を育成する。

「書けないから書かない」生徒を少しでも減らしていくために、生徒が表現した文章をなるべく生かしながらチェックし、語彙力・文法力の育成を図った。

ウ 書くことが苦手な生徒への配慮をする。

「書く力」は個人差が大きく、自由に表現させようとするほど、うまくできない生徒も増える。そこで、グループ学習や段階的な指導などの工夫をした。

エ 正しい英語かどうかよりも、思いついた語句や文の量、内容を優先する。

知っている英語をできるだけ活用させることが、表現力の育成にとっては重要であるので、誤りを気にせず様々な語句や文を使えるような雰囲気作りに心掛けた。

オ 聞き手や読み手のこともできるだけ意識させる。

表現力にとって大事なものは、まず「言いたいことが伝わったか」である。伝える相手を想定し、伝えたい内容を明確に表現できるようにさせた。ただし、自由な表現を妨げないように注意した。

(3) 指導例

ア 第1段階 「見たことを表現する力を高める——絵や写真、またはビデオの活用を通して——」の具体例

① ねらい・生徒が興味を持っている題材を選び、そこから思いつく語句をできるだけ多く挙げさせることにより、使える語句を増やす。

- ・互いに語句を出させることによって、自分が今まで意識しなかった語彙（カタカナ英語を含む）に気付き、それをを用いて表現しようとする意欲を高める。

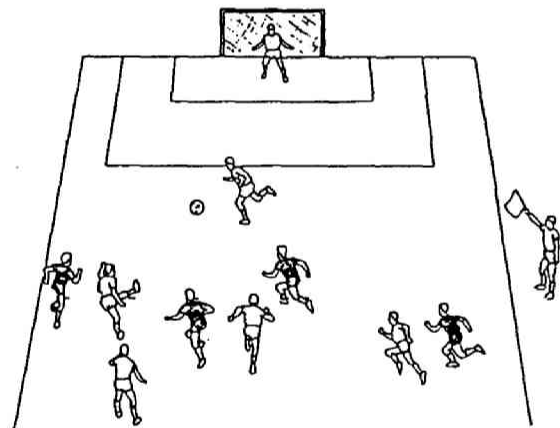
② 指導過程

教師の指導	生徒の活動	留意点
◎サッカーの試合のビデオを見せ、そのあとサッカーに関連した絵や写真を提示	(1) ビデオ、絵、写真を見て、状況をつかむ。 (2) 状況を説明する語句を	<ul style="list-style-type: none"> ・できるだけ多くの語句を思い浮かべるようにさせる。 ・英語の既習語だけにとらわ

<p>して語句を考えさせる。</p> <p>(1) 絵や写真(下の絵参照)を参考に、思いついた語句をあげさせる。</p> <p>(2) 生徒が挙げる語句を板書する。</p> <p>(3) 板書した語句を、説明に効果的な順に並べさせる。</p>	<p>考え、発言する。</p> <p>(3) 板書された語句を、ノートに記入する。</p> <p>(4) 説明に効果的なように語句に順番を付ける。</p>	<p>れずに発言させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 板書された語句が多数の時は、選んでノートさせる。
<p>◎ノートに書かれた語句を用いて、作文をさせる。</p> <p>(1) 記入用紙を配布する。</p> <p>(2) 注意点を説明する。</p> <p>(3) 机間巡視して、助言をする。</p> <p>(4) 完成した者から提出させる。</p>	<p>(1) ノートを見ながら、状況を説明する文をつくる。</p> <p>(2) 説明に効果的なように文を並べる。</p> <p>(3) 記入用紙に清書する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 既習の文型を思い出させる。 • できるだけ多くの文を書かせる。 • 記入用紙にていねいに清書させる。



〔NEW CROWN 1 (三省堂) P49より〕



〔中学体育実技(学習研究社) P134より〕

③ 考察

前半、ビデオ等を見て状況をつかむところでは、生徒は視覚的な刺激によく反応し、活発に発言できた。特に、思いついた語句を口頭で出し合う場面では、互いに語彙力を高める効果があったように思える。英語が不得意な生徒も、自分の考えた語句が板書された時などはそれがきっかけとなって、その語句を用いて作文する意欲をもった。

後半は、できるだけ多くの文を書くよう指示したので、生徒は既習の文型をすべて取り入れようと努力していた。その過程で、肯定文や否定文にとどまらず、命令文や疑問文も用いていた生徒が数多く見受けられたが、このことは、コミュニケーションをある程度意識して書いていることの証拠であるとも考えられる。

イ 第2段階 「思ったことを表現する力を高める—手紙文の作成を通して—」の具体例

① ねらい 三浦知良への手紙を書き、自分の気持ちを書き表すことによって、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。

② 指導過程

教師の指導	生徒の活動	留意点
◎第1段階で行ってきた作品例を紹介する。 既習の基本文型を列挙したプリントを配布しPattern Practiceを行う。	プリントを見ながらPattern Practiceを行う。	・今日やる事をまず明らかにし、目的意識をもって聞かせるようにする。 今までに学習した内容を思い出させる。
◎手紙文を書かせる。 (1) プリントを配布、説明し、手紙文の例を示す。 (2) 机間巡視しながら助言を与える。 (3) 完成した者から提出をさせて、間違っている箇所を指摘し、その間違いを考えさせる。	手紙文を書く。 (1) 構想を練る。 (2) メモを取る。 (資料1参照) (3) 英文で手紙文を書く。 (資料2参照) (4) 完成した後、間違いを指摘されたら、その間違いを考えてなおす。	・基本文型を使って手紙文を書かせるようにする。 ・手紙文は日本語まじりでもよしとする。 ・なるべく和英辞書は使わないようにさせる。 ・目標は10文以上とさせる。
◎まとめ 間違いを訂正し終わった者から前へ出て来させる。 全部訂正し終わったら提出させる。	間違いを訂正し終わったら前へ出ていき、全部訂正し終わったら提出する。	・できなかった者も時間がきたら提出させる。

③ 考察

サッカーについては、関心の高い生徒が多く、英語を不得意とする生徒でも熱心に取り組んでいた。英語を書くのが困難な生徒でも、日本語でメモをとるところで何とか参加していた。

手紙文を書くことを、第1段階での活動やPattern Practice、メモをとるといった活動の後に行ったので、書き出しが思っていたよりスムーズに進んだ。

尚、Pattern Practiceでは、既習の基本文型を全体的に復習できるようにした。

生徒は、十個の文を完成した後、教師から指摘された間違いを自分で考えるようになった。

た。また、全ての間違いを訂正し終えたところで教師に提出するよう指示したところ、生徒は何度も手紙文を教師に見せに来るなど、手紙文を完成させる作業に意欲的に取り組んでいた。

資料 1

Let's try !

英語科通信 No.26
KANAI J. H. S.

KAZUにファンレターを出そう!

(三浦知良)

KAZUをよく知らない人は、その他の有名人、身内の人などでも良い

1. 今までに習った基本文型を使って、できるだけたくさん文を書いてみよう。
まず日本語で、できるだけ簡単な文章で手紙を書いてみよう。それを、英語になおしてみる。(目標は10文)

例) Hello! My name is Shigeki Kitasaka. I'm an English teacher in Kanai junior high school in Machida. I'm as tall as you. I like playing soccer very much. I (have) played soccer in my school days.
By the way Japan lost the game to Korea in Asia tournament.
But try your best!. We are supporting you. It.....

(日本語) ¹⁰⁻²¹¹¹
 私は(11)三浦知良の日本語です。私は馬場総合高校の先生です。
 私は、私は知能、24歳です。私の身長は170cmです。
 私は、サッカーが好きです。私は、サッカーが好きです。
 私は、サッカーが好きです。私は、サッカーが好きです。
 私は、サッカーが好きです。私は、サッカーが好きです。
 私は、サッカーが好きです。私は、サッカーが好きです。
 私は、サッカーが好きです。私は、サッカーが好きです。
 私は、サッカーが好きです。私は、サッカーが好きです。
 私は、サッカーが好きです。私は、サッカーが好きです。
 私は、サッカーが好きです。私は、サッカーが好きです。

資料 2

(ENGLISH)

To KAZU
 Hello! How do you do? My name is
 Ryoko Tanimoto. I'm Kanai junior
 high school student in Machida.
 I like your play very much.
 I don't play soccer.
 I play volleyball.
 You are good soccer player.
 I don't have an interest in soccer.
 But I know you.
 You are impress all people.
 Thank you and I love you!
 Please have a nice time forever.
 2年2組 No. _____
 名 三浦知良 Ryoko Tanimoto.

ウ 第3段階 「相手の反応を考えて表現する——スキットの作成を通して——」の具体例

- ① ねらい
- ・現実的な場面設定をさせ、できるだけ多くの対話文を作らせることによって積極的なコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。
 - ・自然なやりとりを作文させることによって、相手の意向をくみとりながら表現する力を養う。

② 指導過程

教師の指導	生徒の活動	留意点
◎以前に作文した「有名人への手紙」の一つを紹介する。 (1)朗読する。 (2)内容理解の確認。 (3)再度朗読する。	(1)教師が二度読むのを聞く。 (2)教師の質問に答える。 (3)再度聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・やることをまず明らかにして、目的意識をもって聞かせるようにする。 ・作成する意欲がわくような内容のものを紹介する。
◎スキットを作成させる。 (1)作成プリントと和英辞書を配布する。 (2)注意点を説明する。 (3)机間巡視して助言を与える。 (4)できた班から確認をし、文法の誤りなどを指摘する。 (5)推敲させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・スキットを作成する。 (資料3参照) ①机をあわせる。 ②聞きたいこと等を考える。 ③場面を設定する。 ④構想を練る。 ⑤英文を書いていく。 ・教師の確認を受ける。 ・文法の誤り等を訂正する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・班全員で取り組ませる。 ・自分だったら何を話したかをよく考えさせる。 ・場面をしっかりと設定させる。 ・未習単語はなるべく使わないようにさせる。 ・完成してから文法や話の流れなどを確認し、再度考えさせる。

※ 次の時間に「班対抗スキットコンテスト」を行う。(資料4参照)

③ 考察

班毎に作成したことで、英語が不得意な生徒も場面設定を考えたり、話の流れを考えたりするなど、作成に参加することができた。資料3に、推敲前の原稿をあげたが、　は文法的な誤りを、△はより自然なコミュニケーションのためにもう一文入るのではないかということ、それぞれ教師からの助言として示している箇所である。この作品が完成した後で文法等をチェックしたが、単なる和文英訳と違い、自分の伝えたいことがより正確に伝わるようにするためのチェックであったので、生徒はむしろ訂正されることを喜んで受け入れていた。これらのことから、「自然な会話」を作文させることは、自ら相手の反応を考える、すなわち、「相手の意向をくみとる」ことを習得させる上で、有効であったと考える。

限られた時間の中でこれらを完成させることは、生徒にとって苦勞も多いが、「もっと書きたい」という気持ちは、次回への意識づけにもなったように思う。また、資料4に簡略化した「班対抗スキットコンテスト採点表」を挙げたが、次の授業で班対抗で発表し、お互いに評価や審査をする機会を与えられれば、成就感も増し、次回への意欲につながる

と感じた。

資料3 (生徒作品例)

- 劇本を書き、道一つ、自分と三浦知良との対話文を作ってみよう。
- 手順①どんなことを書きたいか、聞いてみたいか全員で考える。(一人一つは出す)
 ②状況を設定する(公園や町中で食う、1対1ゲームをする、家を探訪するなど)
 ③会話の流れを考えていく
 ④実際にしていく(最低7対話)(みんなで順番をひくなどして考えていく)
 ⑤できた後は先生に見せる
 ⑥発表者を決める

①自分か聞いてみたいこと、質問してみたいこと(日本語でよい)

カズオはロイヤルを出したのか。
 イタリアで口癖く生活しているか。
 休日は何をしているか。

②状況(日本語でよい)

公園で会った。

③話の流れ(おおまかに)

お打たはひら、してカズオは何か、と聞く。
 ちいとお話してもいいですか、と聞く。
 質問する。シーズン、フリーグはどのくらい練習するの
 と思うか。
 緊張して眠れない日があるか。
 イタリア語は話せるか。
 何オゴロからサッカーを始めたか。
 休日は何をしているか。
 イタリアで何かかばん、下さい、ときう。

④会話文(英語で)

I: Oh, You are Kazuyoshi Miura, aren't you?
 Kazu: Yes, I am.

I: I'd like to talk with you. May I talk with you?
 Kazu: Yes, you may.
 I: Do you like to play soccer?
 Kazu: Yes, I do.
 I: When you are nervous, can't you sleep?
 Kazu: Yes. A
 I: Do you speak Italian?
 Kazu: Yes, I can speak Italian a little.
 I: Do you read fanletter for you?
 Kazu: Yes, I do. A
 I: What do you doing on holidays?
 Kazu: I'm sleeping.
 I: Thank you very much. Good-by Kazu.
 Kazu: You are welcome. A

⑤発表者

「資料4」 班対抗スキットコンテスト採点表

項目(各3点)	1班	2班	3班	4班	5班	6班	感想
現実的な場面設定							
やりとりの自然さ							
単語の簡単さ							
演技力							
声の大きさ							
合計(15点満点)							

5 研究の成果と課題

第1～第3段階までの段階的な指導を通して明らかになった成果と課題は、以下のとおりである。

(1) 成果

ア 単語が分からないという問題を解決するために、多くの単語を生徒にまず与える方法もあるが、生徒に適切な題材を与え、表現しようとする意欲を高めさせることによって、単語を習得させていく方法も効果的であることが分かった。

イ ビデオなどの画面を見て、ほとんどの生徒は関連する語句を言うことができた。お互いに語句を出し合うことによって、今まで意識しなかった語彙（カタカナ英語を含む）に気づき、それを使って文を書くこともできるという気持ちを、ほとんどの生徒はもつことができたように思える。

ウ 題材を工夫することによって、今まで英語が不得意だった生徒も使いたい語に興味をもち、自分で調べていこうとする意欲が見られた。

エ 自分で表現したい内容が次々に膨らみ、自分で調べたり、聞いたりしながら、相手に正確に伝えたいという気持ちが強まってきたように思える。このことは、正しい文を書きたい、つまり文法的にもきちんとした英文を書きたい、という姿勢につながってきた。そして一歩進んで、どういう表現、言い回しが最も適切かを考えたり、より優れた文が出来上がるよう意識して文を書くようになってきた。

オ スキット作りでは実際の場面を自分達で想定し、創作を楽しみながら、次々に場面作りに取り組んでいた。したがって、生徒の表現力は一段と高まったように思える。

カ グループで活動することにより、お互いに助け合いながら作業を進めたので、全員の生徒がスキット作りに参加することができた。

キ 指導後に再び行った調査では、前回何から書き始めてよいか分からず躊躇していた生徒が、間違いを恐れずに多くの文を書くことができた。「先生、スキットにしてもいい？」という質問まで出て、自然な会話に近いものまで出てきた。

ク 段階を踏んだ指導をするうちに、生徒自身が教科書の題材を上手に利用し、コミュニケーションに有効な手だてを学んでいくようになってきた。

(2) 今後の課題

ア サッカーをあまり知らない生徒にとっては、取り組みに無理もあったので、共通のテーマの選択が必要である。

イ 間違いがあっても表現したいことをたくさん書かせるのか、または文法的に正しい文で表現するよう指導していくのか、個人の達成目標とも関連させながら、検討を重ねていく必要がある。

ウ 自由に表現させようとするほど、うまくできない生徒も増えるので、個別指導、時間のとり方を工夫する必要がある。

エ 今後は、新出単語の導入の際に文を作らせたり、定期テストにおいて自由に文を作らせたりする等、継続的に指導していく必要がある。

オ 教科書の進度、単元との関連等を考慮しながら指導していく必要がある。

カ 評価の在り方も、工夫・改善していく必要がある。

第3分科会

1 小主題

表現力を高めることを通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する指導の工夫

2 小主題設定の理由

学習指導要領「外国語」の目標には、「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の育成がある。コミュニケーション能力を身に付けるためには、コミュニケーションを図ろうとする意欲的・積極的態度が特に重要である。

本分科会では、このことを踏まえ、コミュニケーション能力の育成を目指して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するための指導法について考察することにした。

実態調査の結果、「自分の関心のあることなどについて、英語で話したり書いたりしてみたいですか」という問いについては、「はい」と答えた生徒の数が予想外に少なかった。

このことから、生徒が授業で活動しやすい雰囲気や、「英語をもっと使ってみたい」と自ら思うような指導のあり方を工夫することにした。特に、授業における生徒の言語活動は、教師の発話の方法によって大きな影響を受けられるので、効果的な Teacher Talk の在り方にも着目しながら、本研究を進めることにした。

3 仮説

小主題の具現化のため、次のような仮説を設定した。

教師が Teacher Talk を効果的に使い、さらに、ペア・ワークやスキットを用いながら、生徒にコミュニケーションをスムーズに進める方法を獲得させれば、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することができるであろう。

4 具体的な方策

上記の仮説を受けて、その仮説が実証されるように、次の二つの方法を実際の授業の中で取り入れてみることにした。

(1) 方法1

教師からの一方的な Classroom English ではなく、場面に応じて積極的に Teacher Talk を使うよう心掛けていく。

特に、今まではあまり注目されていなかった、場面に即した表現を意図的に使用しながら教師の使った英語を生徒も自然に使えるようにする。

<方法1の具体例>

a. ものを生徒に渡す時:

Here you are. / Here it is.

- b. 相づちを打つ時：
O.K. / That's right. / Really? / Well... / Let me see... / Wait a minute.
- c. 何か生徒に頼む時：
Will you ~ ? / ~, please.
- d. 確認する時：
Are you sure? / Are you all right? / Do you think so?
Oh, do (did) you? / Is there anything else?
- e. 生徒の言っていることがわからない時：
Pardon? / Once more, please. / Sorry, I can't hear you.
- f. 励ます時：
Try your best. / Maybe you can. / Don't be afraid.
Don't worry. / That's O.K. / I think that's a good question.
- g. あやまる時：
Sorry, I don't know that. / Excuse me. など

(2) 方法2

ペアワークやスキット活動の中で、生徒の応答が Yes. や No. 等の最小限度の応答にとどまることなく、何か一言つけ加える習慣を身に付けさせる。

その内容は、何でもよいから一言付け加えるのではなく、状況や場面に応じ、最も適切な一言を言えるように練習させる。

特に、次のような状況や場面での一言を扱う。

電話での会話 / ショッピング / 時間を尋ねる / ものを依頼する時 /
相手の言っていることがわからない時 / 知らない人に話しかける時 など

<方法2の具体例>

① Communication Strategiesを意識した Guess Workの指導例 (2年)

- 授業の最初の Warm-up として、あるいは新出事項の導入として、位置付けた。
- 継続的におこなうことを、前提とした。
- この活動を行うための時間は、長くて10分とした。
- この活動は、ペアで行う。
- Guess Workで、自分が相手の答えを当てた場合、必ず、場面に即した一言をつけ加えるようにした。

部屋に何がありますか？

1. There is a _____ in my room.
2. There is a _____ in my brother's room.
3. There is a _____ in my sister's room.

Dialogue:

A: Is there a computer in your room?
 B: No, there isn't.
 A: Is there a _____ in your room?
 B: (当たってなければ) No, there isn't.
 (当たっていれば) Yes, there is.
 A: Oh, you have a good thing! (いい物もってるね!)

◆ No. 2, 3 については,

Is there a _____ in your brother's room?
 _____ in your sister's room?

Oh, ^{he} she has a good thing!

選ぶ語句

TV / air-conditioner / video-deck
 bed / CD player / tape-recorder

DATE _____ YOUR PARTNER _____

YOUR POINTS ☆ ☆ ☆

DID YOU WIN? YES / NO

明日の予定は何ですか？

1. I'm going to _____ tomorrow.
2. My friend is going to _____ tomorrow.
3. My brother is going to _____ tomorrow.

Dialogue:

A: Are you going to see the movies tomorrow?
 B: No, I'm not.
 A: Are you going to _____ tomorrow?
 B: (当たってなければ) No, I'm not.
 (当たっていれば) Yes, I am.
 A: Oh, really?

◆ No. 2, 3 については,

Is ^{your friend} your brother going to _____ tomorrow?

選ぶ語句

go shopping / stay in bed late / go to juku
 play basketball / clean the room / go to the game center

DATE _____ YOUR PARTNER _____

YOUR POINT ☆ ☆ ☆

DID YOU WIN? YES / NO

[考察]

- ただ Yes/No を当てるだけの活動でなくなった点は、良かった。
- 状況に応じて最後の一言が変わるので、生徒にとっても使い方の違いが学習できて良かった。
- ペア・ワークの話題を生徒にとって興味あるものにしたことによって、生徒が飽きずに、楽しんで活動できた。
- この活動は、授業の導入と復習の両方に使うことができるので、とても効果的だった。
- ゲーム的要素を含んだ活動だったので、生徒は意欲的に取り組むことができた。

② スキットを用いた具体例

2～3人のグループで既習の重要表現を使ってスキットを作成させ、発表させる。スキットを作る際、相手の言葉に対して、Yes. No. など単発に答えるのではなく、質問したり、相づちをうったり、自分の意見を加えたりしながら、会話が発展するように留意させる。また、スキットを発表した後で、教師の評価に加え、生徒同士の相互評価や、前回と比べての自己評価等も加え、評価の仕方を工夫することによって、話そうとする意欲を喚起した。さらに、スキットを使用する際の指導は、指導内容や、指導する学年に応じて段階をふむことにした。

第一段階	<p>次の手順により重要表現の定着を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> •具体的な場面（たとえば、「お店で」「電話で」「アメリカ人と出会う」「～にいった経験」など）を設定する。 •ある程度形式の定まった dialogue の空欄に、それにあった表現を入れさせる。 •ワークシートを使って重要表現の Pattern Practice をさせる。（資料5参照）
第二段階	<p>第一段階で習得した重要表現の応用練習をさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> •生徒同士で自由にスキットを考えさせる。 •全員の前で発表させる。（資料6参照）
第三段階	<p>具体的な場面で、状況に応じた応答ができるようにさせる。</p> <p>第二段階を、より発展させた形として、ALTとのチームティーチングなどの場面を通して、相手の発言に対して、質問をしたり、相づちを打ったり、聞き返したり、自分の意見をつけ加えたりして、自分で考えて会話をつなげる練習をさせる。</p>

お店での会話

資料 5

★ペアで雰囲気を考えながら、やってみましょう！

Dialogue 1: (品物を買う場合)

店員: Hello. Can I help you?

客: Yes. Will you show me some _____?

店員: Sure. This way, please.

客: (選んだ物を手に持って) I'll take this one.

It's a birthday present for _____.

店員: Shall I wrap it?

客: Yes, please.

Dialogue 2: (品物を買わない場合)

店員: Hello. Can I help you?

客: No, I'm just looking. Thank you.

店員: O.K.!

資料 6

(店員) A: Hello, can I help you?

(客) B: Yes, will you show me some シューズ?

A: Sure. This way, please.

B: I'll take this one. It's a birthday present for my dog.

A: What's サイズ?

B: 30cm

A: ☆Pardon?

B: 30cm

A: ☆your dog?

B: Yes. Name is Happy, very cute.

A: Ok, Shall I wrap it?

B: Yes, please.

[考察]

ア 前記の第二段階での実践例のように、短い会話をつなげるのに有効な表現を使っている
(資料6の☆印参照)

スキットの会話はそれ自体は、決して難しい表現を使っているわけではないが、全体の流れとしては、スムーズに会話が流れている。

イ Really? And you? How about ~? Why ~? By the way ~, など、聞き返したり、相づちをうったり、話題の変換をはかるなど、話題をつなげようとする工夫がみられるようになった。

ウ 例えば、Have you ever been to Yokohama? の質問に対して、相手が自分の気持ちを一言付け加えたことによって、「次の日曜日に一緒に行こう」という約束にまで会話が発展したケースもあった。

エ 以上の点をまとめると、まず、生徒自身が興味・関心のある題材や、話そうとする必然性の高い場面を設定し、さらに場面に即した一言をつけ加えさせる練習を行えば、断片的な会話から、少しずつ会話を発展させることができるようになることが分かった。さらに、適切な評価をすることによって、より積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることができると考えられる。

5 研究の成果と課題

生徒にとって、習得した英語を実際のコミュニケーション活動に結び付けられないことが、英語の学習に対する意欲を高められない原因の一つとなっている。コミュニケーション活動の中でも、とりわけ話すことは、生徒が最も行いたいと思っている活動であるが、話すためには、話す相手、話す場面、話すための話題の三つの要素が必要である。したがって、生徒に英語で話す力を身に付けさせるためには、これらの要素を意図的・計画的に設定しなければならない。本分科会では、これらのことを考慮しながら研究を進めた。その結果、明らかになった研究の成果と課題は、以下のとおりである。

(1) 成果

- ア 暗記だけで終わるのではなく、伝達する内容を自分なりに理解し、何とか相手に伝えようと努力する生徒の姿が見られるようになった。このことから、コミュニケーション活動を通して、生徒自ら自分のよさや可能性を高めようと努力していることが分かった。
- イ 自己評価によって、授業への集中力や興味・関心、積極的な態度が以前より身に付いてきたように思える。また、「楽しかった」「分かった」という評価も見られるようになってきた。
- ウ ALT (Assistant Language Teacher) との授業においても、積極的に会話をする生徒の数が増えてきた。また、時にはタイミングのよい応答や自信のある話し方をする生徒の姿も見られるようになってきた。
- エ 会話中に Eye contact が取れる生徒、相手が理解しやすいように身振り、声量、話すスピードなどを工夫している生徒も見受けられるようになってきた。

(2) 課題

- ア スキットの内容は、生徒にとって身近で表現しやすい題材を選ぶことが大切であるので、その選定をさらに工夫していく必要がある。
- イ ペアワークでの生徒のアドリブを生かしながら、会話が発展していく方法をさらに研究する必要がある。
- ウ スキットの評価を行うに当たっては、積極的に話そうとする態度や、スキットの独創性、Non-verbal な表現（身振りや顔の表情）の豊かさ等を、特に高く評価すべきである。したがって、スキットにおける評価の在り方も、今後さらに研究しなければならない。
- エ Teacher Talk は常に生徒にとって理解しやすく、しかも正しい英語で行うことが重要である。したがって、Teacher Talk の内容だけでなく、話し方についても研究を深める必要がある。その際、小道具や身振りを効果的に活用し、初めての表現にも日本語による解説をできるだけ介在させず、臨場感のある自然な英語を聞かせる工夫をする必要がある。
- オ リスニングを重視しながら、スピーキングに対する興味・関心、意欲を高める指導法をさらに研究する必要がある。

* 「表現力を高めることを通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する」ためには、教師の日頃の指導法の工夫・改善は言うまでもない。したがって、今後もこのことに関する研究を深めていきたい。

V まとめと今後の課題

本研究は、「表現力を高め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する指導の工夫」を三つの分科会において、それぞれ仮説を立てて研究したものである。

第1分科会では、「話すこと」を中心としたコミュニケーション活動を研究した。実態調査によると「話すこと」は、生徒がもっとも身につけたいと思っている英語の力である。

しかし、現実には授業において生徒が英語を話す機会が少なくなりがちであった。そこで、コミュニケーション活動を多く授業に取り入れることで、生徒の話す力や意欲を育成しようと考えた。単に英語を話す機会を多く作るだけでなく、はじめは簡単な絵を見せて基本的な文を言わせ、生徒のレベルに応じて段階的・発展的なコミュニケーション活動(Graded Communicative Activity)

を通して、話す力を付けさせた。生徒たちは、この活動を通して質・量の両面における表現力が高まり、「話すこと」への意欲につながった。

第2分科会では、「書くこと」を中心としたコミュニケーション活動を研究した。生徒たちは自分の考えや興味のあることを英語で書きたいという気持ちはあっても、実際に授業での意欲に結びついていない傾向にあった。その原因は、授業で取り上げる教材が、必ずしも生徒の興味・関心と適合していないことや、生徒の語彙力・文法力の不足にあると考えた。

そこで、語彙力と文法力を育成しながら、あくまで生徒の興味・関心のある写真や絵などを活用し、段階的に文を書かせる指導をした。段階を踏んだ指導をするうちに生徒自身が題材を上手に利用し、コミュニケーションに有効な手だてを学んでいくようになってきた。

第3分科会では、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成という「情意面」を中心に研究した。コミュニケーション能力の育成をめざすとき、知識・技能を修得させるとともに、情意面を育成することは欠かすことができない重要なテーマである。授業において、教師の指導方法を工夫することが生徒の意欲や態度に大きな影響を与えると考えた。

実態調査の結果によれば、教師が英語を使って授業を進めることを歓迎する生徒が多かった。そこで、教師からの一方的な Classroom English だけでなく、教師と生徒のコミュニケーションを考えた Teacher Talk をできるだけ多く使うことによって、英語でコミュニケーションを図ることに慣れさせようと試みた。また、相手からの質問に対して、Yes, _____ / No, _____ だけで答えるのではなく、その場面に応じて、自分の考えを一言つけ加えたり、聞き返したりすることができるようにスキットやペア・ワークを使って訓練した。このことが会話をより発展させるきっかけになり、表現力を高めることにもつながった。

この研究を通して感じたことは、授業の中で生徒のコミュニケーション活動を多く取り入れる場合、できるだけ生徒の興味・関心に適する活動を行わせること、また臨場感のある場面設定を心がけることが必要だということである。

今後は、生徒の意欲・関心・態度を高める身近な題材を研究するとともに、コミュニケーション活動をより活発に行わせる評価の在り方についても研究を重ねていきたい。